

## サルトルとボーヴォワール、二つのエクリチュールにおける コサキエヴィッチ姉妹の果たした役割について

伊ヶ崎 泰 枝

### 要 旨

ジャン＝ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールは、しばしば周囲の人々をモデルにして小説の中で描いている。なかでも、オルガ・コサキエヴィッチと妹のワンダ・コサキエヴィッチは、二人の作品に最もインスピレーションを与えた人物である。サルトル、ボーヴォワール、オルガの3人は、1930年代に慣習に支配されない新しい関係としてのトリオを試みるが、失敗に終わった。サルトルの小説『自由への道』のイヴィック、ボーヴォワールの小説『招かれた女』のグザヴィエールは、オルガをモデルにしており、怠惰、気まぐれ、激しさ、反抗といった性質を通して若さそのものを象徴している。しかし、怒りっぽさ、攻撃性といった、姉よりも激しい妹ワンダの性質も使われている。イヴィックとグザヴィエールという人物像の、共通点と違いに着目することで、サルトルとボーヴォワールのそれぞれの想像力や芸術的判断が照らし出される。

キーワード:サルトル, ボーヴォワール, コサキエヴィッチ姉妹, 『自由への道』, 『招かれた女』

### はじめに

ジャン＝ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールが、周囲の親しい人々からインスピレーションを得て小説の作中人物を創造したことはよく知られている。1940年にサルトルはボーヴォワールに次のように書き送っている。

さて、起きていること、それは僕達が自分の小説の中に身を置いているということだ。〔…〕だが、その小説（＝『靈感が優位にあるとき』）においても僕の小説（＝『嘔吐』）においても同様に、僕達は、自分をさらけ出し、自分のことや自分に起こった小さな出来事、僕達が好きな類の人達について語るんだ。では、どうしろと言うんだ、僕達は無防備だ〔…〕。

Or, ce qui arrive c'est que nous nous sommes *mis* dans nos romans. [...] Mais dans ce roman [= *Quand prime le spirituel*] comme dans le mien [= *La Nausée*], nous nous étalons, nous parlons de nous, de nos petites histoires, du genre de gens que nous aimons, alors qu'est-ce que vous voulez, nous sommes sans défense [...]¹).

このように、彼らが小説の中で、自身の話や経験したこと、そして周囲の人々について語りながら自らをさらしていることを認めている。

なかでも、二人に共通して交友関係のあった実在の人物の中で、サルトルとボーヴォワールの作品に最もインスピレーションを与えた人物といえば、オルガ・コサキエヴィッチと妹のワンダ・コサキエヴィッチの名前が挙げられよう。コサキエヴィッチ姉妹は、戦時中は二人の作家と、サルトルの元生徒ジャック＝ローラン・ボスト、ボーヴォワールの生徒ナタリー・ソロキヌ（ボーヴォワールの回想録の中ではリーズ・オブラノフ）からなる「身内」<sup>2)</sup>のメンバーとして共同生活を送っていた時期もある。サルトルとボーヴォワール、コサキエヴィッチ姉妹、ボストとの親密な交流は生涯続いた。サルトルとボーヴォワールの書簡、手帖、日記において、彼女達の名前は頻繁に見出される。

本稿では、サルトルとボーヴォワールの二つのエクリチュールにおけるコサキエヴィッチ姉妹の果たした役割を論じる。

## 1. オルガ・コサキエヴィッチ

1931年、23歳のボーヴォワールは教員生活をスタートする。マルセイユの高校で一年教えた後、1932年にルーアンの高校に着任する。オルガ・コサキエヴィッチはそのときの生徒である。父親が白系ロシア人で、彼女の個性は高校の中で際立っていた。当時サルトルは、ル・アーヴルの高校で教鞭を執っていた。ボーヴォワールとオルガは友情を結び、やがてオルガはサルトルとも親しくなった。

大人の仲間入りをすることへの拒絶から、二人の高校教師は、オルガの若さ、自由、反抗、非協調性を高く評価した。ブーズヴィルに住んでいるオルガの両親は、娘に医学を学ばせようとしていたが、彼女は2年間落第を続けた。ボーヴォワールはオルガの両親を説得し、オルガの哲学の勉強をサルトルと一緒にルーアンで指導することを認めさせた。しかし、この勉強はすぐに放棄された。

ルーアンで、サルトル、ボーヴォワール、オルガの3人はトリオーしきたりや慣習に支配されない新しい関係の創出を試みる。ボーヴォワールは、回想録『女ざかり』の中で次のように説明している。

私達は、刹那に生きることに無条件に打ち込む彼女（＝オルガ）を賛美していた。しかし、何より先に私達が心がけていたことは、彼女のため、そして私達のために、未来を築くことだった。これから先は二人のカップルのかわりにトリオになろう。私達は人間関係はつねに新しく発明されるべきもので、アプリアリにとくに優越した形態もなければ、不可能な形態もないと考えていた。トリオという形態は私達に必要だと思われた。

Nous admirions qu'elle [=Olga] se donnât sans réserve à l'instant ; cependant, notre premier soin fut d'édifier pour elle, pour nous un avenir : au lieu d'un couple, nous serions désormais un trio. Nous pensions que les rapports humains sont perpétuellement à inventer, qu'*a priori* aucune forme n'est privilégiée, aucune impossible : celle-ci nous parut s'imposer<sup>3)</sup>.

しかし、ほどなくルーアンという田舎町でトリオは息の詰まるような関係になり、失敗に終わった。パリでもこの試みは同じ困難に落ち込んだ。最終的に、オルガはジャック＝ローラン・ボストと付き合うことでトリオの試みに終止符が打たれた。

さて、サルトルは1935年に旧友のラガッシュ医師のすすめでメスカリン注射を打ち、幻覚症状を経験した。この時期に看護師の役割を果たしたオルガに対して凄まじい執着を経験した。サルトルは、手帖『奇妙な戦争』の中で次のように書き記している。

私の狂気とオルガに対する恋情の時期、二年間私は最低の状態にあった。1935年の3月から1937年の3月までだ。しかし、それでもこの不幸は私にとって有益なものとなった。狂気は真実らしさの境界を後退させた。このとき以来、私は自分のブルジョアの楽観主義を放棄し、他の人にと同様、私にもあらゆることが起こりうることを理解した。私は以前より暗いが、しかしそれほど無味乾燥ではない世界に入っていった。オルガはといえば、彼女に対する私の恋情はブンゼンバーナーの炎のように私の型にはまった不純な部分を燃え立たせた。私は痩せ細り、抑制がきかなくなった。わが安逸さよ、さらばだ。

Je fus au plus bas au moment de ma folie et de ma passion pour Olga : deux ans. De Mars 1935 à Mars 1937. Mais pourtant ces infortunes me furent profitables. La folie recula les limites du vraisemblable : de ce moment j'ai abandonné mon optimisme bourgeois et j'ai compris que *tout* pouvait m'arriver, aussi bien qu'à un autre. J'entrai dans un monde plus noir mais moins fade. Quant à Olga, ma passion pour elle brûla mes impuretés routinières comme une flamme de bec Bunsen. Je devins maigre comme un coucou et éperdu ; adieu mes aises<sup>4)</sup>.

サルトルのオルガに対する執着は激しいながらも、サルトルは「自分が彼女に何を期待しているのかわからない」<sup>5)</sup>のだとボーヴォワールは回想録に記している。結局のところ、サルトルはオルガを手に入れることができず、その暗い想念、恨みは、手帖『奇妙な戦争』の随所に書き記されることになる。

サルトルの小説『自由への道』の主要作中人物マチウ・ドゥラリュは、34歳の高校教師である。彼には長年の恋人マルセルがいるが、ロシア系の若いイヴィック・セルギンに対しても恋

心を寄せ、執着を覚えている。イヴィックの容姿はオルガ同様金髪で、イヴィックはオルガと同じようにダンスの名手で一晩中踊り明かすこともできる。イヴィックは、刹那にしか意味を見いだしていない。彼女はまるで人生があと5、6年しかないかのように考えて、死や病気や老いを恐れている。また、イヴィックは、オルガ同様医学を目指す、試験に失敗する。

イヴィックはマチウに対して、時にぎこちなく媚びることもあるが、自由で気まぐれで、マチウを振り回す。マチウは彼女を手に入れることはできない。マチウは、一体自分が彼女に何を求めているのかわからず自問を繰り返す<sup>6)</sup>。イヴィックに対する欲望を他人の欲望を通して自覚するなど、その感情は複雑である。著者のサルトルは、手帖『奇妙な戦争』の中で、マチウが自分の分身であることを認めている<sup>7)</sup>。また、この作品には、ボーヴォワールにあたる人物がいないため、トリオの側面は排除されているようだ。

他方、ルーアンでのトリオの失敗の経験が、ボーヴォワールの『招かれた女』を生み出した。この作品は、作家フランソワーズ・ミケルがグザヴィエール・バジェスをルーアンからパリに呼び寄せ、養うところから始まる。グザヴィエールはオルガ同様金髪で、やはりダンスの名手である。フランソワーズは、グザヴィエールに速記など手に職をつけさせようとする。やがて芝居を始めることも提案するが、グザヴィエールの学びにさしたる進展はない。グザヴィエールは、オルガ・コサキエヴィッチ同様大変気まぐれで個性的な感性を持つ。音楽について知的な理解を拒み、「音だけでたくさん、好きなのは音だけ」<sup>8)</sup>と語る。そして、やはり現在という瞬間にしか意味を見出さず、「医者にかかるぐらいなら死んだほうがまし」<sup>9)</sup>だと考えている。

そして、フランソワーズのパートナーである演劇人、ピエール・ラブレースも、グザヴィエールに執着を覚える。しかし、サルトル、そして彼の作中人物であるマチウ同様、彼はグザヴィエールに「何を求めているのかわからない」<sup>10)</sup>のである。フランソワーズ、ピエール、グザヴィエールの3人は、「男1人、女2人のただの三角関係ではなく、3人の特別な、難しいかもしれないが美しく幸福になれるような関係」<sup>11)</sup>の構築を試みる。

『招かれた女』は、フランソワーズを含めた3人の作中人物のそれぞれの意識に焦点が置かれた3人称の語りの交替からなる。しかしながら、グザヴィエールは、視点を与えられることのない作中人物である。作品の題辞であるヘーゲルの言葉「おのおのの意識は他の意識の死をもとめる」*« Chaque conscience poursuit la mort de l'autre »*が暗示しているように、グザヴィエールは完全な他者の意識の具現となる。

ところで、オルガ・コサキエヴィッチが、トリオの息苦しさから火のついたタバコを自分の掌に押し付けた事件は、『自由への道』、『招かれた女』の両作品の中で使われている。これは、オルガ・コサキエヴィッチをめぐるエピソードが、直接作品の中に移し替えられている例の一つであるが、二つの作品の中でまったく異なる意味を帯びている。『自由への道』のイヴィックは、ダンスホールで小刀を自分の掌に突き刺す。マチウは、イヴィックが掌に小刀を突き刺した後で、自分の掌に小刀を突き刺す。『ダイヤモンド』とマチウは考えた。『彼女は“小さなダ

イヤモンド”と言った。』彼は幸せでもはや自分のことなど何も考えなかった。外でベンチに座っている気がした。ダンスホールの外、自分の人生の外に。」<sup>12)</sup> このように、彼はうっとりとした幸福を味わう。他方、『招かれた女』のグザヴィエールは、スペイン風の酒場でタバコを自分の掌に押し付ける。この事件の中で、フランソワーズは、「貪欲と絡み合った、まぎれもなく自分のためだけに存在する何か。観念においてすら近寄れず、達したと思えばその観念が溶解する。掴みがたい、絶え間なく湧き出しては逃れていく、内側からだけ見えるが、外側からは窺い知ることのできないもの」<sup>13)</sup> を発見する。そして、一体であると信じていたピエールとの繋がりも見失い、自分の存在が世界から消えてしまったような衝撃を受ける。しかし、ピエールは、『自由への道』のマチウ同様、情熱に燃える目をグザヴィエールに注ぐ。このように、このエピソードが両作品の中に移し替えられた場面を比較することで、二人の作家の想像力や芸術的判断の違い、およびサルトルとボーヴォワールがそれぞれ男性、女性であることの違いが見出される。

オルガ・コサキエヴィッチは、怠惰、気まぐれ、感情の激しさ、反抗を通して若さそのものを象徴している。実際、ボーヴォワールはサルトルに、オルガが「インスピレーションの源」<sup>14)</sup> であることを書き送り、『戦中日記』にもオルガがルーアンで発揮していた魔法のような性質を書き留めている<sup>15)</sup>。オルガ・コサキエヴィッチが、二人の作家にとってミューズであることは論を俟たない。二人の作家は、オルガの感じ方、考え方を愛し、若いオルガの目を通して、自分達のものとは異なる風景を見ることを重視した。

## 2. ワンダ・コサキエヴィッチ

さて、オルガの妹、ワンダ・コサキエヴィッチについて述べたい。サルトルは、2年にわたるオルガへの不幸な恋を経て、1936年から37年にかけて妹のワンダと出会った。ワンダとの出会いを次のように手帖『奇妙な戦争』に記している。

最低の状態で、みじめさのあまり、何度か平然と死を考えたほどであった。歳を取り、失望して、終わったと感じ、誤解から『嘔吐』が*N.R.F*から断られたと確信していた。そしてまさにこの頃、すべてがうまく行き始めた。私の本は採用され、『壁』も37年6月の*N.R.F*に掲載された。私はワンダと知り合った。パリの教師に任命された。突然、素晴らしい途方もない若さが入ってくるのを感じた。私は幸福で、人生が心地よいと思った。

Et justement vers ce moment, quand j'étais au plus bas – à ce point de misère que j'envisageai à plusieurs reprises la mort avec indifférence –, me sentant vieux, déchu, fini, persuadé – par suite d'un malentendu – que *La Nausée* venait d'être refusée par la *N.R.F.*, tout se mit à me sourire : mon livre fut pris, *Le Mur* parut dans la *N.R.F.* de Juin

37, je connus Wanda, je fus nommé professeur à Paris. Je me suis senti tout d'un coup pénétré d'une formidable et profonde jeunesse, j'étais heureux et je trouvai ma vie belle<sup>16)</sup>.

こうして、ワンダ・コサキエヴィッチは、サルトルの生涯の愛人の一人となった。ワンダは舞台女優になることを勧められ、サルトルはワンダに役を与えるために戯曲を書き続けた。

他方、ポーヴォワールの回想録の中でワンダについて語られている事柄は大変少ない。姉のオルガとともにワンダがパリに身を落ち着け、彼女も「身内」のメンバーの一人となったことが手短かに書かれている。その他、ワンダが、歌手のマルセル・ムルジヤ、ポーヴォワールの教え子ナタリー・ソロキーヌと気が合ったことが素っ気なく記載されているのみである。回想録『或る戦後』においても、語り手のポーヴォワールは、舞台女優であるワンダ・コサキエヴィッチの芸名マリー・オリヴィエを用いてサルトルの戯曲の配役に言及するのみである。したがって、ポーヴォワールの回想録の読者は、回想録の最終巻である『別れの儀式』でポーヴォワールがサルトルの晩年を記録した際、ワンダがサルトルを取り巻く女性達の一人であったことについて唐突に知ることになる。

このように、ワンダ・コサキエヴィッチは、「身内」のメンバーであったにもかかわらず、ポーヴォワールが回想録に書くことを意図的に避けた人物の一人である<sup>17)</sup>。ポーヴォワールは、回想録『女ざかり』の序文で、「すべてを語らないということを読者たちに前もって断っておかなければならない」と述べて、読者と読書契約を結んでいる<sup>18)</sup>。サルトルの女性関係は、ポーヴォワールが回想録の中で詳しく語らなかった事柄の一つであろう。サルトルの書簡集『女たちへの手紙』が彼の死後1983年に刊行された際も、ワンダ・コサキエヴィッチについては、仮の名前「タニア・ザズリッチ」が使用されている。

しかし、ポーヴォワールがワンダについて語らない事情はもう少し複雑である。まず、ポーヴォワールが、自分の伝記を書いたディールドル・ベールに語っているように、攻撃的な性質のワンダとの関係の不和もその理由の一つであろう<sup>19)</sup>。事実、ポーヴォワールがジャック＝ローラン・ポストに書き送った書簡にも、ワンダとの関係の難しさが度々窺える<sup>20)</sup>。さらに、サルトルが、ワンダ・コサキエヴィッチとの結婚を考えたことがある点は言及されなければならない。サルトルは、徴兵されていた1940年の5月12日に、ワンダとの結婚を考えていることを次のようにポーヴォワールに書き送っている。

ねえ、昨日、僕はとても苛々していた。X線検査を受ける予定のタニアから完全に取り乱した手紙を受け取ったからだ。[...] 今回は、彼女が自分を必要とする度に空約束で彼女をほったらかすにはうんざりしている。もし彼女が望むなら、そして、長々と待たされるのであれば、三日間の結婚休暇を得るために彼女と結婚する用意があると彼女に書いた



ところだ。あなたには愉快ではないだろう。純粋に形式だけのものであっても「全く身動きとれなくなる」のだし。

Mon petit j'étais très énervé, hier : j'ai reçu une lettre totalement affolée de Tania qu'on va radiographier. [...] Cette fois, j'en ai assez de la laisser tomber chaque fois qu'elle a besoin de moi avec de bonnes paroles. Je viens de lui écrire que si elle veut et si les délais ne sont pas trop longs, j'étais prêt à l'épouser pour avoir trois jours de permission. Je pense que ça ne vous sera pas agréable; bien que ce soit purement symbolique, ça fait « engagé jusqu'au cou »<sup>21)</sup>.

しかし、サルトルがワンダに、「結婚休暇が取り消されたため結婚はできない」と説明している5月17日の手紙は、サルトルが宛先を誤り、ボーヴォワールは読んでいるが、ワンダには届かず仕舞いとなった。サルトルは、ボーヴォワールがこの手紙を読んだことをワンダが知ったら「気も狂わんばかりだろう」<sup>22)</sup>と書いている。これらのやりとりから、サルトルの優柔不断さと、ボーヴォワールの嫉妬が垣間見えるようだ。

さて、姉のオルガが怠惰、気まぐれ、激しさ、反抗を通して若さそのものの象徴であるなら、妹のワンダもほぼ同様の気質を備えていた。サルトル本人も、ジョン・ゲラシとのインタビューの中で、次のように語っている。

そうだね、オルガがボストと付き合い始めた時、僕は嫉妬した。[...] でも、そのあとで、そこから脱するためにうまい手口を見つけた。オルガの妹、ワンダだ。彼女達は似ているが、ワンダの方が若いのでその方がよかった。自分が愛した女性は自分を見捨てた。それで、彼女にそっくりの、しかも彼女より若い女性を手に入れた。

Bon, j'ai été jaloux quand Olga a entamé une liaison avec Bost. [...] Mais ensuite, j'ai trouvé une combine pour m'en sortir : la sœur d'Olga, Wanda. Elles se ressemblaient mais Wanda était plus jeune, c'était encore mieux. La femme que j'aimais m'avait abandonné, alors j'ai obtenu son portrait craché, mais en plus jeune<sup>23)</sup>.

このように、サルトルは、オルガのかわりにワンダを手に入れたことを認めている。事実、サルトルは、手帖『奇妙な戦争』の中でしばしば姉妹を区別していない。

コサキエヴィッチ姉妹の捨て鉢の傲慢さ、彼女達は、それを身体の中、魅力の中、優美さの中に位置付ける。それらは衰えることがあり、似通っている。自分達の過ちの前での、コサキエヴィッチ姉妹の謙虚さ。なぜなら、彼女達は、自分達の自我を受け入れるからだ。Orgueil désespéré des Kosakiewicz, qui le placent en leur corps, en leur charme, en leur

grâce, objets flétrissables et comparables. Humilité des Kosakiewicz devant leurs fautes, parce qu'elles assument leur Moi<sup>24</sup>).

他方、ボーヴォワールも『戦中日記』の中で、姉妹の女性らしさについて二人一緒にまとめて考察を綴っている部分がある。

でも、コサキエヴィッチ姉妹の身体や女性らしさについて彼女達が持つ意識とともに彼女達を想像してみる。これらすべての女達に自分達が「巻きぞえにされている」と感じるはずだ。それは彼女達にとって存在するが、彼女達の胸をむかつかせる。そこから、彼女達の軽蔑の攻撃的な性質が導かれる。どうあっても、彼女達は脅かされていると感じている。Mais j'imagine les Kos. avec cette conscience qu'elles ont de leur corps et de leur féminité, comme elles doivent se sentir « compromises » par toutes ces femmes — ça existe pour elles, et pourtant ça les écœure, d'où le caractère agressif de leur mépris : elles se sentent menacées malgré tout<sup>25</sup>).

では、ワンダ・コサキエヴィッチは、サルトル、ボーヴォワールの小説作品の中の人物創造において、どのようなインスピレーションを与えたのであろうか。

まず、サルトル本人は、ジョン・ゲラシとのインタビューの中で、ワンダが部分的にイヴィックのモデルであることを断言している。

彼女を手に入れることは確信していたのですか。つまり、先週彼女と夕食をとりながらわかったのですが、彼女はむしろ移り気で、自然で、怒りっぽくて、予測できない。まさしく、あなたが『魂の中の死』で描いているように。

ほとんどの批評家や伝記作家達が、イヴィックはオルガだと考えていることを知っていましたか。彼らがなんと愚かであるかを示している。

*Vous étiez certain qu'elle vous tomberait dans les bras? Je veux dire, c'était, et c'est toujours, je l'ai découvert la semaine dernière en dînant avec elle, quelqu'un de plutôt volage, spontané, irascible et imprévisible, exactement comme vous la décrivez dans La Mort dans l'âme.*

Vous saviez que presque tous les critiques et les biographes pensent qu'Ivich c'est Olga? Ce qui montre comme ils sont bêtes<sup>26</sup>).

ワンダが与える印象の中で、ジョン・ゲラシが彼女の「怒りっぽさ」« irascible »を指摘している点は大変興味深い。なぜなら、上述したように、ボーヴォワールとワンダの不和も、ワン



ダの怒りっぽさや攻撃性、嫉妬が理由であると思われるからだ。ボーヴォワールはディールドル・ベールに、「グザヴィエールの最も不快な部分は、ワンダと私の難しい関係からきている」<sup>27)</sup>と語り、グザヴィエールの人物創造において、その性質の陰湿な部分はワンダの貢献であることを認めている。また、サルトルや、その周囲の人々との交流があったミシェル・コンタは、姉妹を比較して、ワンダが姉のオルガより「さらにずっと気まぐれ」*« encore beaucoup capricieuse »*であると評している<sup>28)</sup>。

このように、『自由への道』のイヴィック、『招かれた女』のグザヴィエールの作中人物創造の生成過程において、ワンダ・コサキエヴィッチの存在が、攻撃性や気まぐれといった、ネガティブな要素を増幅する形で貢献していることがわかる。

### 3. 姉妹の統合

サルトルとボーヴォワールのエクリチュールにおける周囲の人々の役割の重要性は、いくら強調してもしすぎることはない。サルトル、ボーヴォワールの二人の作家は、コサキエヴィッチ姉妹を組み合わせることで、それぞれの作品の女性主要作中人物を創り出した<sup>29)</sup>。イヴィック・セルギン、グザヴィエール・パジェスのモデルは、従来オルガ・コサキエヴィッチとされることが多いが、ワンダ・コサキエヴィッチの存在は、これらの人物創造の過程において、いくつかの性質を増幅し、深みを与え、よりピトレスクな人物像を生み出すことに貢献している。

しかしながら、オルガ・コサキエヴィッチとワンダ・コサキエヴィッチの果たした役割の決定的な違いについても言及する必要がある。サルトルにとって、オルガ・コサキエヴィッチは手に入れることのできなかつた女性である。『自由への道』のマチウも、イヴィックを手に入れることはなく、彼女は言い寄ってきた若い男と結婚することになる。そして、ボーヴォワールにとっては、オルガとワンダの存在の意味は大きく異なる。ルーアン、そしてパリで試みたトリオは、サルトル・ボーヴォワール・オルガからなるもので、このトリオの関係においてオルガをワンダに置き換えることはできない。ボーヴォワールがポストに認めた手紙の中に、次のような一節が見受けられる。

[...] ワンダがサルトルにムルジ (=マルセル・ムルジ) とのトリオを大真面目に提案した。サルトルは自分が男色ではないと言って拒んだ。

[...] Wanda a proposé très sérieusement à Sartre de faire un trio avec Mouloudji; Sartre a refusé sur ce qu'il n'est pas pédéraste<sup>30)</sup>.

ここからわかるのは、トリオの中では少なくとも二人はバイセクシャルに近い人間である必要があることだ。実生活においてボーヴォワールとオルガは同性愛関係にあったことが、死後刊

行されたボーヴォワールの日記や書簡から窺える。『招かれた女』においては、フランソワーズとグザヴィエールの官能的なダンスのシーンがその自伝的要素の反映であろう。さらに、フランソワーズは、グザヴィエールのためにこれ以上の自己犠牲を払わないために、第二部第8章でジェルベールと恋人同士になる。このことが、ジェルベールに好意を寄せているグザヴィエールに激越な感情の吐露を小説の最終部で引き起こす。ところで、ジェルベールのモデルはジャック＝ローラン・ポストである。ボーヴォワールは、オルガの恋人（のちの夫）であるポストと、1938年に実生活において恋人同士となり、その関係は長く続いた<sup>31)</sup>。『招かれた女』に見られる同性愛的な雰囲気や、フランソワーズとジェルベールの恋人関係といった自伝的要素は、ワンダ・コサキエヴィッチとはまったく無縁の要素である。したがって、このことに鑑みれば、グザヴィエールの人物像においては、ワンダ・コサキエヴィッチの果たした役割は限られたものであろうと推測できる。

いずれにせよ、コサキエヴィッチ姉妹からインスピレーションを得た女性の作中人物は、サルトルとボーヴォワールのエクリチュールにおいて決定的に一人の人物として生成される。なぜなら、彼らの作品が二人の人物を必要としていないからである。ボーヴォワールは、1966年に日本で行われた講演の中で、自伝と小説の違いについて述べている。

小説とは、我々の世界内存在の意味を照らし出すために作る一種の仕組みのようなものである。それゆえ小説には明らかな利点がある。我々を取り巻く世界の中の不要なものすべてを取り除き、純然たる事実性を消し去ることができる。

Un roman c'est une espèce de machine qu'on fabrique pour éclairer le sens de notre être dans le monde. Il y a donc un avantage évident du roman ; il permet de supprimer tout ce qu'il y a d'inutile dans le monde qui nous entoure, d'en abolir la pure facticité<sup>32)</sup>.

したがって、不必要な要素が小説の中で排除される結果、小説の全ての要素は意味を帯びることになる。似た性質の二人の女性が一人の女性作中人物として再創造されるのは、サルトル、ボーヴォワールの二つのエクリチュールの中で、重複した不必要な要素が排除されるという芸術的判断の結果であろう<sup>33)</sup>。サルトルとボーヴォワールのそれぞれの作品の中で、コサキエヴィッチ姉妹から、深みのある一人の女性作中人物が生み出されたことは大変興味深い。

## 結論

ジャン＝ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールが、コサキエヴィッチ姉妹からインスピレーションを得て小説の作中人物を創造していく過程を追った。オルガ・コサキエヴィッチをモデルとした人物創造は、妹のワンダ・コサキエヴィッチの要素を重ねたり増幅さ

せたりすることで深みを増していった事実が導かれた。さらに、『自由への道』のイヴィック・セルギンと『招かれた女』のグザヴィエール・パジェスという人物像の共通点と違いに着目することで、サルトルとボーヴォワールのそれぞれの想像力や芸術的判断が見出される。

サルトルとボーヴォワールの二つのエクリチュールでは、二人に共通して交友関係のあった多くの実在の人物をモデルとして、何人もの作中人物が創り上げられている。二人の作品が、異なる次元で関連しながら相補う重層性を生み出しているという観点から、今後二人のエクリチュールにおける間テキスト性をさらに論じる必要があるだろう。

## 注

- 1) Jean-Paul SARTRE, *Lettres au Castor et à quelques autres* 1940-1963, Gallimard, 1983, p. 217.
- 2) « Nous fréquentions presque exclusivement le petit groupe que nous appelions "la famille" : Olga, Wanda, Bost, Lise. Ils avaient entre eux et avec chacun de nous des rapports nuancés, dont nous étions tous soucieux de respecter la singularité ». Simone de BEAUVOIR, *La Force de l'âge*, Gallimard, 1960, Folio, p. 578.
- 3) *Ibid.*, p. 278. 日本語訳は『女ざかり』, 朝吹登水子, 二宮フサ訳, 紀伊國屋書店, 1963年を参照した。
- 4) Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre*, Gallimard, nouvelle édition augmentée d'un carnet inédit, 2015, p. 307.
- 5) « Lui non plus, il ne trouvait guère son compte dans cette affaire, non seulement parce que les hésitations et les revirements d'Olga le mettaient en rage, mais parce qu'en vérité il ignorait ce qu'il attendait d'elle [...] ». Simone de BEAUVOIR, *La Force de l'âge*, *op. cit.*, p. 295.
- 6) « Il se dit : "Je ne sais pas ce que je veux d'elle". » Jean-Paul SARTRE, *Œuvres romanesques*, Gallimard, 1981, p. 447.
- 7) « Ça me donne à réfléchir : pourquoi Antoine Roquentin et Mathieu, qui *sont moi*, sont-ils, en effet, sinistres, alors que, mon Dieu, la vie ne se présente pas si mal pour moi ? [...] Eux, c'est moi décapité ». Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre*, *op. cit.*, pp. 670-671.
- 8) « - Vous savez, quand on parle de bonne ou de mauvaise musique, ça me passe par-dessus la tête, dit-elle avec une modestie agressive. Je ne comprends rien du tout ; j'aime les notes pour elles-mêmes : juste le son, ça me suffit ». Simone de BEAUVOIR, *L'Invitée*, Gallimard, 1943, Folio, p. 121.
- 9) « Jamais, dit Xavière, je crèverais plutôt que de voir un médecin ». *Ibid.*, p. 231.
- 10) フランソワーズとピエールがグザヴィエールについて語り合う場面がある。  
« - Qu'est-ce que tu veux d'elle somme toute ? dit-elle.  
- A vrai dire, je me le demande, dit Pierre ». *Ibid.*, p. 81.
- 11) « - Ce que je vais tâcher de bien lui faire comprendre, dit-elle, c'est que tu n'es pas un homme entre deux femmes, mais que nous formons tous les trois quelque chose de particulier, quelque chose de difficile peut-être, mais qui pourrait être beau et heureux ». *Ibid.*, p. 259.
- 12) « "Un diamant, pensait Mathieu, elle a dit : un petit diamant." Il était heureux, il ne pensait plus rien sur lui-même, il avait l'impression d'être assis au-dehors sur un banc : au-dehors, hors du dancing, hors de sa vie ». Jean-Paul SARTRE, *Œuvres romanesques*, *op. cit.*, p. 614. 日本語訳は『自由への道』海老坂武, 澤田直訳, 岩波文庫, 2009年を参照した。
- 13) « Quelque chose était là, qui s'éteignait soi-même avec avidité, qui existait pour soi-même avec certitude ; on ne pouvait pas s'en approcher même en pensée, au moment où elle touchait au but, la pensée se dissolvait ; ce n'était aucun objet saisissable, c'était un incessant jaillissement et une fuite

- incessante, transparente pour soi seule et à jamais impénétrable ». Simone de BEAUVOIR, *L'Invitée*, *op. cit.*, pp. 354-355.
- 14) « Il faut dire que Kos. est d'une ressource formidable [...] ». Simone de BEAUVOIR, *Lettres à Sartre 1930-1939*, Gallimard, 1990, p. 102.
- 15) « [...] ça me fait drôle de la laisser dans sa chambre, seule, alourdie de tristesse, et cette solitude retrouve un peu le caractère magique qu'elle avait à Rouen ». Simone de BEAUVOIR, *Journal de guerre*, Gallimard, 1990, p. 106.
- 16) Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre*, *op. cit.*, p. 308.
- 17) その他、回想録の中で語ることを避けた人物として、サルトルの養女アルレット・エルカイク＝サルトルや、ビアンカ・ランブラン、エヴリーヌ・レイの名前が挙げられる。
- 18) « Cependant, je dois les prévenir que je n'entends pas leur dire *tout* ». Simone de BEAUVOIR, *La Force de l'âge*, *op. cit.*, Prologue. 読書契約「*contrat de lecture*」については、Philippe Lejeune, *Le Pacte autobiographique*, Seuil, coll. « Points », 1996 を参照されたい。
- 19) Deirdre BAIR, *Simone de Beauvoir*, traduit de l'anglais, Fayard, 1991, p. 241.
- 20) « Wanda me hait, je vous raconterai, pour des histoires de rendez-vous déplacés avec sa sœur. "Le Castor, c'est un homme", a-t-elle dit à Sartre la rage au cœur ». Simone de BEAUVOIR, Jacques-Laurent BOST, *Correspondance croisée 1937-1940*, Gallimard, 2004, p. 279. « Wanda me hait de plus en plus [...] ». *Ibid.*, p. 297.
- 21) Jean-Paul SARTRE, *Lettres au Castor et à quelques autres 1940-1963*, Gallimard, 1983, pp. 219-220.
- 22) « Elle aurait été folle si elle avait pensé que vous aviez lu sa lettre et ça me serait tombé sur le dos ». *Ibid.*, p. 246. これらの手紙のやりとりをめぐる奇妙な状況については、Yasue IKAZAKI, *Simone de Beauvoir, la narration en question*, L'Harmattan, 2011, pp. 215-227 を参照されたい。
- 23) John GERASSI, *Entretiens avec Sartre*, Grasset, 2011, (traduit de l'anglais *Talking with Sartre : Conversations and Debates*, Yale University Press, 2009), p. 391. ボーヴォワールの妹であるエレヌ・ド・ボーヴォワールも、同じことを証言している。「Sa passion pour Olga ayant été malheureuse, il la reporta sur sa sœur Wanda, laquelle vivait de la même spectaculaire manière ». Hélène de BEAUVOIR, *Souvenirs*, Séguier, 1987, pp. 115-116. エレヌ・ド・ボーヴォワールは、コサキエヴィッチ姉妹がよく似ていて、姉同様、ワンダが無為に意味を見出すことにサルトルが魅了されたと言っている。サルトルの頼みで、彼女はワンダにデッサンを教えたが、怠け者でものにならなかったようだ。
- 24) Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre*, *op. cit.*, p. 142.
- 25) Simone de BEAUVOIR, *Journal de guerre*, *op. cit.*, pp. 90-91. 日本語訳は『ボーヴォワール戦中日記』西陽子訳、人文書院、1993年を参照した。
- 26) John GERASSI, *Entretiens avec Sartre*, *op. cit.*, pp. 391-392.
- 27) « On négligea complètement le fait que les aspects les plus déplaisants de Xavière venaient de ma relation difficile avec Wanda ». Deirdre BAIR, *op. cit.*, p. 266.
- 28) « On sait deux choses de sa relation avec Olga : [...] et qu'il l'a remplacée par sa sœur cadette Wanda, plus jolie, plus chatte, moins intelligente et encore beaucoup capricieuse ». Michel CONTAT, *Pour Sartre*, P.U.F., p. 534.
- 29) 実際、サルトルとボーヴォワールは、しばしば、同じ人物を組み合わせて作中人物の人物創造を行うことがある。例えば、サルトルの『ある敗北』のヒロイン、コジマにおいては、彼の最初の大恋愛の相手であったシモーヌ・ジョリヴェと、サルトルがその子供の家庭教師をしていたモレル夫人（ボーヴォワールの回想録ではルメール夫人）の面影が見られる。ボーヴォワールもまた、1931年頃、シモーヌ・ジョリヴェとモレル夫人をモデルにしたプレリアーヌ夫人という人物が登場する小説を書いていた。伊ヶ崎泰枝、「シモーヌ・ジョリヴェを語るボーヴォワール、問いを巡る人物創造」、『広

島大学フランス文学研究』34, 2015年, pp. 50-64を参照されたい。

- 30) Simone de BEAUVOIR, Jacques-Laurent BOST, *Correspondance croisée 1937-1940*, *op. cit.*, p. 369.
- 31) ボーヴォワールは、この1938年7月の出来事をサルトルに書き送っている。Simone de BEAUVOIR, *Lettres à Sartre 1930-1939*, *op. cit.*, pp. 62-63. なお、ポストが徴兵されている間に、先に浮気をしたのはオルガなのだから、ポストもボーヴォワールと関係を結んで構わないという理屈であったらしい。Michel CONTAT, *op. cit.*, p. 524 および Isabelle GRELL, *Les Chemins de la liberté de Sartre, genèse et écriture (1938-1952)*, Peter Lang, 2005, p. 97 参照。
- 32) Simone de BEAUVOIR, « Mon expérience d'écrivain », in Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *Les Écrits de Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1979, p. 443.
- 33) ワンダに言及するのを避けたボーヴォワールの回想録においても、オルガ・コサキエヴィッチ一人に、作家達にインスピレーションを与える唯一のミューズの役割が与えられている。ここには、ワンダ・コサキエヴィッチを重複した不必要な要素として排除するという芸術的判断もあったのではないだろうか。伊ヶ崎泰枝, *Quelques cas de la représentation des femmes autour de Jean-Paul Sartre dans les Mémoires de Simone de Beauvoir — la narration autobiographique et les éléments factuels* —, 『島大学フランス文学研究』21, 2002年, pp. 29-44を参照されたい。

## The role of the Kosakiewicz Sisters in Sartre's and Beauvoir's writings

Yasue IKAZAKI

### Abstract

Jean-Paul Sartre and Simone de Beauvoir often depicted the people around them in their novels. Especially, Olga Kosakiewicz and her little sister Wanda Kosakiewicz were the biggest source of inspiration for their writings. In 1930's, Sartre, Beauvoir and Olga attempted to build a trio – a new relationship, free from established practice and failed. Ivich in Sartre's *The Roads to Freedom* and Xavière in Beauvoir's *She Came to Stay* were based on Olga. Her characters of laziness, whim, intensity, and revolt symbolize youth itself. However, Wanda's anger and aggression, more intense than her older sister is also used. And, while comparing Ivich to Xavière, their common points and differences show Sartre's and Beauvoir's respective imagination and artistic selection.

**Keywords:** Sartre, Beauvoir, the Kosakiewicz sisters, *The Roads to Freedom*, *She Came to Stay*